

## 投書欄に見る「世のため人のため」

—私の公益学事始（1）—

斉藤 達雄

はじめに

「公益学」とは何か。むずかしく考えることはやめようではないか。

お隣りのおじいさんに「おはようございます」と挨拶をする。おじいさんは「やあ、おはよう、元気で（学校に）行けよ」と答えてくれる。「公益」って、そんなことでもあるのではなからうか。人間と人間との関係は、世のため人のためにながり得る。

私はジャーナリズムにほぼ三〇年間にわたり身を置き

てきたのだが、私なりにできる公益学って何だろうか、と考える。そして思う。手近にある新聞をほんの少し角度を変えてよんでみたらどうだろうか、と。政治・経済・社会面だけが新聞ではない、新聞には投書欄もある。そこには多くは市井の人々の意見が紹介されている。「公益学」のためのヒント・答えは、社説だとか、論説などの中にもあるだろうことは否定しないけれど、投書欄にこそ（？）あるのではなからうか。そう考えて切り抜きを始めた。

以下は「私の公益学事始」である。

どこから始めようかー。

毎日新聞の投書欄（二〇〇〇年五月三十一日付）に次の文章があった。『ぼくたち、正直に謝って良かった』。投書者は中学生の大槻敬之君で一四歳だ。住所は「京都府綾部市」と記してある。

『ぼくたちの住んでいる町区は二五戸です。その中に中学生の男子四人と小学生の女子一人がいます。ぼくたちは、ひまがあると、キャッチボールをして遊びます。広い遊び場がないので、キャチボールぐらいしかできません。

この間、ボールが受けられずに、近所のおじさんが止めていたトラックのバックミラーを壊してしまいました。みんなでおじさんの家へ謝りに行きました。そして「請求書は、ぼくの家へ持ってきてください」といいました。

すると、おじさんは「この町区でも子供が少なく、もうすぐいなくなって遊ぶ声も聞かなくなる。だから大

いにわんぱくぶりを発揮して、元気で遊びなさい」と言っ  
て、しかられませんでした。

一週間ほどして、たまたまおじさんと会うと「バックミラー直ったけれど、壊したことを正直に言えたので、代金はいらないよ」と言われました。おじさんありがとう。』

### 「少年犯罪とマスコミ報道」

マスコミ報道による印象では、少年たちは犯罪を犯す。本当だろうか。昨今ではひとまず「本当」ではあるのだけれど、「ニュースとは何か」をおさらいしておこうではないか。ニュースとは何か。これは「公益学」の定義よりも簡単だ。「イヌが人間を噛んでもニュースではない。人間がイヌを噛んだらニュースである」。少年（例えば一七歳）による人を殺すという犯罪は、やはり珍しいことなのではないのか。だから大きく報道される。いわゆる大人による犯罪は、あまりにも多いらしいので、

マスコミではそれほど目立った報道はしない傾向にありそうだ。マスコミによる扇動的な報道は、それ自体が犯罪になり得る。「公益」の対極にあるかもしれない。

マスコミ論についても、投書欄はにぎにぎしいのだが、ひとつだけ選んでみた。題して『あおり立てず正確な記事』（『朝日新聞』二〇〇〇年一〇月一六日。法人役員 曾我 誠。川崎市 六八歳）

『……これからの新聞に求められるのは、ますます複雑になる社会現象の本質を先見性をもって継続的に解明することだろう。その前提として以下の三点を望みたい。

一、無意味な扇情的報道を慎むこと。脳死移植の過激な取材が、かえって情報公開を妨げ、十七歳少年の例外的行動をきっかけにした「十七歳報道」が少年法改悪の動きとなった責任の一端を新聞は担っている。

二、客観的データを大事にすること。青少年による犯罪の凶悪化がいわれたが、これは戦後の犯罪統計全体を見れば、事実誤認というものだった。早い時期に新聞

がこのことを報道していれば、無用の誤解と恐怖を人々に植え付けずに済んだのではないだろうか。

三、記事は足で書くの原点を守る。最近の公官庁のパブリシティーは周到になり、それに乗せられた息遣いの感じられない記事が目立つ。大型の調査報道もリクルート事件以降は目にせず、記者のサラリーマン化に拍車がかかっているように思えてならない。記者クラブを出て、もっと現場を歩いて欲しい。』

「あおりたて」られたらしい主婦による人生相談も新聞にはある。『「凶悪少年」恐れ足すくむ。幼児抱え、外出も控え気味に』（千葉・A子）の相談は『二〇代の主婦。四歳の息子がいます。近ごろ中高生の凶悪犯罪が立て続けに起こっていますが、同じ年頃の少年たちと街ですれちがうだけで足がすくみます。……』（『読売新聞』二〇〇〇年一〇月一二日）である。この相談に対して回答者の藤原正彦氏（数学者）はユーモアたっぷりに（藤原氏は日本エッセイスト協会賞の受賞者でもある）次の様に答えている。

『中高生による犯罪には確かに驚かされます。あなたの心配が分らないでもありません。ただ、ここ一年で中高生による凶悪犯罪が一〇件あったとしても、中高生は全体で一千万人近くもいるのです。すなわち、あなたが出会う中高生のうち、凶悪犯罪を起こすような者は一〇万人に一人くらいなのです。

一〇〇万人に一つの危険を恐れるのはつまらないことです。一〇〇万回自転車に乗れば、恐らく一度は車にひかれるでしょうし、一〇〇万回モチを食べれば恐らく一度は窒息するでしょう。それでもあなたは、口笛を吹いて自転車に乗ってよいし、お汁粉に舌鼓を打ってよいのです。

一〇〇万回に一度の事故に遭った場合は、お気の毒ですがあきらめるしかないのが現実なのです。日本ではなんと一人に一人の割合で毎年交通事故の犠牲になっています。もし中高生に出会うたびに足がすくむなら、車に出会うたびに腰を抜かすか気絶しなければならなくなります。』

しかし、人間は人間を殺す権利をもつのか。ここでは『「人を殺すな」自明の理ではないか』という、長崎市の婦人（四七）の意見を紹介したい。松尾由紀子さんの職業は「パート」。『毎日新聞』（二〇〇〇年六月一日）による。

『先日の本紙「新聞時評」で「なぜ人を殺してはいけないのか」と、もし我が子にたずねられて、迷わず答えられる親がどれだけいるだろうか」という一節に驚いた。そんなことを尋ねる子供がいるのだろうか。もし我が子がそんな問いを発したら、私はこのようなばかげた質問をする子供に育ててしまったことを恥じるだろう。

正当防衛でもない限り、人を殺したら自分の生を否定されても仕方がないのである。自分の人生が大切であるように、他人の人生も大切なのだ。そんな当然のことも分らないほど、現代人は人でなしになったのだろうか。分らない人たちがいるから、毎日のように殺人事件が起きるのだろう。特に若者の中には、ゆがんだ現代社

会の中で、この世に生をうけた喜び、意味を見つけられず、自分の人生の大切さが分からない人たちが増えている。

だが、ほとんどの大人は毅然として自明の理を語れるのだと私は信じた。』

### 「若者論。茶髪について」

別の若者論をよんでみよう。「茶髪」や「顔黒メイク」についてはどうだろうか。以下は投書欄から拾った「茶髪」三題である。

『師走の夕、パートからの自転車で帰る途中、坂道で前からきた若者にぶつかり、みごとに転んだ。ジャガイモ、玉ネギ、ニンジン。買い物袋から飛び出した野菜が、坂道を転げて行く。』

『早く拾わなければ』と思うが、ぶつかった相手は赤いジャンパーによれよれのジーパン、茶髪にピアス。心

の中で『しまった』と思い『バカ野郎!』の罵声を覚悟しました。

ところが、若者は突っ立つ私をよそに、あっちこっちに散らばった野菜を一つ残らず拾い集め、自転車のかごに入れてくれたのです。

そして「おばさん、大丈夫か? おれ、ボーッとしてたので、すまんなあ。今夜カレーライスだろう。おれ、カレー大好きや。」そう言って立ち去ったのです。

足を少し打ったけれど、その痛みも消えてしまいました。

「不良かと思ったら、心やさしい、いい若者。自分が恥ずかしかった」。この出来事を主人に話しながら、きょうは特別においしいカレーが出来そうな気がした。」

(『おれ、カレー大好きや』パート 山根 直子 大阪府吹田市 五七歳 一九九九年二月三一日付『毎日新聞』より)

『八月のことでした。長女が羽田から千歳に帰る時の話です。安いエア・ドゥは満席で、仕方なく他社のスカ

イメイトを利用することにしたが、そのための写真代や入会費などで、それでも足りずぎりぎりの予算は、チケット購入時に五十円不足になりました。

携帯電話での緊急コールに、とりあえず、カウンターの人に着払いしますからと頼んでみたらとアドバイス。しかし無理といわれたと涙声で言う。娘の計画性のなさに腹を立てる一方で、涙ながらに五十円不足を訴えている子供への、あまにも冷たい態度も情けなかった。千歳のカウンターで直談判中、娘から「知らない老夫婦が五十円くれた」と喜びのコール。

お名前をうかがったら、「いいから」と、すーっと居なくなったとのこと。私はその老夫婦に千歳より両手を合わせました。千歳の到着ロビーに小銭を投げ込む泉があり、感謝の気持ちが届けとの思いを込めて五十円を投げ入れました。

そして、千歳に着いた娘の姿を見て、ほっとする前にビックリ。頭は金髪、ピアスは三個、爪は真っ黒、目の周囲はピカピカアイシャドー。あー、こんな格好の娘によくぞ五十円を渡してくれました。老夫婦の勇気に改め

て感謝。私なら、かわりを避けてしまいそうな外見です。本当に心より感謝申し上げます。ひどい外見でしたが、私には素直ないい娘であることもお伝えしたいと思います。』

『「こんな娘でもよくぞ五〇円を」看護婦 横山 千鶴  
北海道伊達市 四七歳 一九九九年一月三日付『朝日新聞』より』

ここで「顔黒メイク」の高校生にも発言してもらおう。  
西角久美子さん。一八歳。埼玉県大宮市。（『産経新聞』  
二〇〇〇年八月二六日の『顔黒メイクも歴史の一コマ』  
より）

『……私たち女子高生は化粧をしてきれいになりたいという願望もちろんあるが、一種のファッションとして楽しんでいる。この年ごろじゃないとできないことだと思う。……昔もミニスカートがはやったりしていたし大人の批判を受けていた。いつの時代も若者は後先など考えないのだ。私たちの時代のガングロメイクも歴史の一ページなのだと思うとても誇らしい』

しかし「茶髪」は、教育の間では深刻かつ重大な問題であるらしい。先生にとっても生徒にとっても。生徒はそれだけで先生方から非難される。以下は「茶髪」の娘をもつ母親の嘆きである。それは同時に学校教育とは何かについての問いでもある。あるいは「日本文化」(一)の問題であるかもしれない。差別とは何かにもつながらかもしれない。

『中三の娘が学校での生徒態度が良くない、ということとで悩んでいます。素直に先生の話が聞けない、反抗的態度をとる、約束を守らない、服装が乱れている……。原因の一つとして考えられるのが、髪の色です。』

娘は四歳のころからスイミングに通い始め、小五では選手コースに入り、日曜日を除く毎日泳いでいます。ですから、プールの塩素で脱色されて茶色い髪になっています。その髪の色を何とかしろと注意されるので、最初のうちは「しやうがないよね、染めているわけじゃないんだから。水泳でいい成績を出して、みんなに納得して

もらえるように頑張ればいい」と話して、二年生で関東大会に出場出来ました。

ところが、三者面談で「本人にも話しましたが、黒く染めても構わないです。他の先生方も同じ考えです」と言われ、染めるということもあり得るんだと驚くと同時に、娘の頑張りには認めてもらえないのかとがっかりしました。反抗的だったので、そう言われたのかもしれない。

高校でも水泳を続けたいと言っているのですが、今後、髪を黒く染めなければならぬのでしょうか(『プールで脱色、娘が悩む茶髪』団体職員 緒方 みゆき 前橋市 四三歳 『朝日新聞』二〇〇〇年九月二七日)

### 「介護保険について」

いわゆる老人問題についてもふれねばなるまい。「世のこと人のこと」についてだからである。厚生省が二〇〇〇年九月一四日にまとめた調査によると、六五歳以上

の人間は日本では同月一日現在（推計）で二一九〇万人で総人口の一七・三％となり、人数・割合ともに過去最高を更新した。（新聞各紙は翌日の朝刊で報道）

また世界保健機構（WHO）が「健康寿命」という新しい指針を発表している。「健康寿命」とは何か。通常、平均寿命というのは、今年生まれた赤ちゃんが何歳まで生きられるかを指すのだが、健康寿命というのは病気や障害によって健康的にすごせない期間を差し引いた寿命で、健康度を計る指針だという。それによると、日本は世界で最長の七四・五歳。女性が七七・二歳、男性が七一・九歳。平均寿命（一九九八年）は女性八四・〇歳、男性七七・二歳だったので、一生のうち女性では約七年、男性で約五年を病気などですごすことを意味する。（ここでは「ニュースがわかるQ&A——「健康寿命」」毎日新聞二〇〇〇年六月二一日より。WHO発表の記事は各紙六月五日付に詳しい）

こうして介護、それにかかる保険料も深刻な問題となる。社会の在り方がここでも問われているのだが、総務庁による高齢者の意識調査（一人暮らしは六五歳以上。

夫婦のみの世帯は夫六五歳以上、妻六〇歳以上が調査対象。二〇〇〇年九月二七日発表）によると、生活満足度については「満足している」が多数を占めた。が、「不満」と答えた人が一人暮らしで二一・六％、夫婦世帯で一四・三％といずれも前回（一九九四年度）の二倍以上になっている。（各紙による報道は九月二八日付朝刊）

以下は順に、再び投書欄からひろった『介護保険料でついに非常時』と『生きる望みを失った老婦人』である。

『介護保険料納入通知が届きました。どきどきしながら開封したところ、保険料は年金からの天引きで納めるような形式です。少ない年金額から天引きされて食費はどうなるのやら。』

昨年は病院暮らしで出費もかさみました。こんな状態では、先に尽きるのは蓄えの金か命かななどとお友達と話合っています。話の結論は「お上が決めたことだから私たちはやはり運が悪かった」、とぼとぼと帰途に就いたのです。

さて、いまからこれ以上に一切の無駄遣いをやめてつ



つましく暮らすように心掛けましょう。何、戦争下を思

えば……。』(無職 宮崎かな系 七七歳 川崎市多摩区

『東京新聞』二〇〇〇年八月三〇日)

『親しくしていた知人が、自らの命を絶った。独り暮らしの老婦人だった。阪神大震災に遭い、五年余りをなんとか持ちこたえてきたが、病弱と加齢、その上かわいがっていた猫が死に、ますます落ち込んでいた。

……そんな時に、介護保険の徴収開始の説明書が届いた。それを読んで「もう生きる望みがなくなった」とも言っていた。

亡くなった夫の厚生年金と国民年金から家賃を払えば、残りはいくばくもなかった。この上、介護保険料を十月から年金から天引きされるという。介護保険を利用するにも負担が必要で、とても払える金がない状態だった。これでは死ぬしかないということになる。明日は我が身である。政治家は、災害などにあつてぎりぎりの生活を送っている庶民の存在をきちんと認識してほしい。』(自由業 斎藤 民雄 七四歳 神戸市 『読売新聞』二〇

〇〇年九月一日)

### 「自殺・過労死のこと」

警視庁のまとめによると、一九九九年中の一年間に自殺をした人の数は三万三〇四八人で七五%が四〇歳以上だった。二年連続の三万人台で九八年は三万二八六三人。負債や失業など「経済・生活問題」に起因する自殺は前年より一一・六%増えて五人に一人の割合となった。(二〇〇〇年八月一七日の警視庁発表。各紙の記事はその翌朝に掲載)

自殺・過労死・リストラ・企業責任も「公益学」の対象ではなからうか。「人命は社会にとっても大切な財産」であるからだ。以下は過労死についての投書二例である。改めて、「日本が豊かな社会だって？」と問いたくなる。

『週刊誌の編集長だった長男が突然死したのは過労とストレスが原因だったとして、両親が長男の勤務先の会

社を相手取り損害賠償を求める訴訟を今月、東京地裁に起こした。長男は昼間から翌日未明までの仕事を強いられた徹夜勤務も多かったという。

ところで、私の三人の子供たちも、これが日本の一般的な勤務実態なのかと驚いてしまうほど忙しい。二人の息子は夜十時、十一時の帰宅が普通で、広告・出版関係の仕事をしている娘も締め切りに追われ、時には徹夜もする。それなのに時間外手当などはつかない。…まじめなサラリーマン、OLが疲れきっていると感じるのは私だけだろうか。企業が利益を追求するのは当然だが、過労死や過労自殺が珍しくなくなりつつある社会が正常だとは到底思えない。

人命はその家族にとつてはもちろん、社会にとつても大切な財産だ。政府はもつと若者の労働環境の在り方について真剣に検討してもらいたい。」

（『過労死しない社会目指したい』自営業 奥山 敦子 五七歳 横浜市『読売新聞』二〇〇〇年八月一八日）

『四日の山内様の「夫を奪われるサービス残業」を拝

見致しました。労働省によるフレックス勤務の是正勧告は、わが家の場合手遅れでした。

私の夫も電機メーカー勤務で、連日終電まで残業し、休日出勤も当たり前の生活を送っていました。そして先日亡くなりました。それまで元気で働いていたのになあという間の出来事でした。

後には十歳と三歳の子供が残されました。葬儀は「父の日」と重なり、子供たちは用意していたプレゼントを、ひつぎの中に納めました。

……子供と過ごす時間を十分にとれないことを、いつも気にしていた優しい父親でした。子供たちはなぜ父親が急にいなくなつたのか納得できないようです。働き過ぎて逝つたことは疑いもない事実ですが、それを法的に証明するのはとても大変です。

働きすぎている皆様、自分が突然いなくなつたら、残された者はどうなるか考えて見て下さい。働きすぎている自分の体に危機感を持って下さい。こんな思いをするのはわが家だけで十分です。』（『夫が過労死して戸惑う私たち』主婦 渡辺 しのぶ 三八歳 千葉県市原市

『朝日新聞』二〇〇〇年七月二〇日)

「国際親善のこと、

在日韓国・朝鮮人のこと」

明るい話をさがしたい。いわゆる国際親善の在り方も「公益学」のテーマにしたい。この地球上には、いま六〇億人の人間が住んでいる。我々はお互いの生涯の持ち時間内に、お互いに全員とは会えない。そんな必要はない。限られた時間・空間での異文化交流は、甘くもあり辛くもある。

二〇〇〇年六月二〇日付の『朝日新聞』に掲載された「主婦 小室 早紀子さん(東京都国分寺市 三四歳)の投書(『子らが大合唱 アンニョーン』)を紹介しよう。小室さんは、次のように書かれている。あの、歴史的な南北首脳会談(二〇〇〇年六月一二日から一四日)直後のことであった。

「『アンニョーン、アンニョーン』と、米国イエローストーン国立公園の谷にこだました。見ると、レンタカー内の我が家の三歳と五歳の息子たちに向かつて、大きく手を振っているおじさんがいた。ハンゲル文字のバスの前で、運転手が満面の笑顔で、こちらに手を降り続けていたのだ。「何ていう英語なの」と尋ねる子供たちに、「こんにちはって言っているの。英語じゃないのよ、お隣りの国の言葉なの。君たちのことを自分の国の子だと思っているのよ、きつ」と言うと、「わーい」と叫び、車の窓から身を乗り出して両手をいっぱいに広げ、「アンニョーン」と。あちらのバスの乗客も全員、車窓からこたえてくれて、大合唱となった。

帰りの飛行機で、茶髪の短期留学生の高校生に囲まれた席で、「僕たち、お隣りの国の子供に間違えられたんだよ。すごいでしょう。アンニョーン」と、誇らしげな彼らに、二十一世紀を見たような気がした。』

『ハンゲル覚え友と話したい』という『朝日新聞』への投書は、二〇〇〇年六月二三日付の『声』の欄のことで

ある（高校生 関戸 梨乃 埼玉県戸田市 一八歳）。

『去年に続きハングル検定を受けました。ハングルの勉強する動機は、韓国人の友達と同じ言葉を使いたいから。』

アメリカ留学中に会った彼らと友達になることは、決して簡単なことではありませんでした。日本と韓国との過去の出来事と、それを受け止める両国の姿勢の差が、今も隣国でありながらも遠い存在となるこの距離を埋められずにいるのだと思います。私が日本人だからというだけで、友達という言葉がやけに遠く感じたり、自分が日本人だということが恥ずかしく感じたりしたこともありました。

私もそうですが、両国の間に何があったのかを知らない若者がほとんどだと思います。でも、今回のハングル検定で、以前よりも圧倒的に増えていた学生の受験者を目にした時、正直驚いた半面、すごうれしかったのです。

南北首脳会談が話題になっている今、この機会に多く

のことを学びたいし、みんなにも学んで欲しいと思います。』

日本と韓国・北朝鮮さらには日本と中国・アジア・太平洋諸国との「過去の歴史」については、いまここでは触れない。ただひとつ。日本が「侵略をした、悪いことをしたなど」というのは、自虐的歴史観だ」という人々が、発言の場を広げている。しかし「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」（ワイツゼッカー前ドイツ大統領。ドイツ敗戦から四〇年の一九八五年五月五日の演説）の信条こそ、人類の未来へつながる指標であろう。

次に登場する『友の結婚式に出られない私』（会社員堀野 みゆき 千葉県松戸市 三〇歳 『朝日新聞』二〇〇〇年五月二三日）は、どのような日本と韓国・北朝鮮との過去の歴史によって生じたのか。「声」を紹介するのみにとどめる。

『先日、思いがけず差別の問題にぶつかりました。

高校時代からの友人から結婚式の案内が届きました。

私は「出席」に印をつけ返信したのですが、数日後に彼女のお母さんから電話で「来ないで欲しい」と言われました。理由を聞くと「日本人のあなたがくると、親類たちを刺激するから」と言うのです。

忘れかけていましたが、彼女は在日韓国人でした。その後、電話は彼女にかわり、言いにくそうに「呼べなくてごめん」と謝られました。

そういえば昔、高校に入学したころ、彼女と友人になったと家で話したところ、母から「あまり親しくならないうちに」と言われ、母が持つ差別意識にしばらく悩んだことがあります。

彼女の母も、私の母も、子供のことを思つての発言だとは思いますが、今も残る差別が民族の間に溝をつくり、友人の結婚のお祝いもできないことを悲しく思います。』

そういえば、ボクシングのWBCスーパーフライ級の新世界チャンピオンである徳山昌守（本名・洪昌守）ホ

ン・チャンス）は在日三世であり、国籍は「北朝鮮」である。ホンさんはそのことを公言し、誇りをもって大阪で行われたタイトルマッチ戦にいどんだ。挑戦相手は韓国の曹仁柱（チョ・インジュ。当時チャンピオン）。二〇〇〇年八月二七日の“南北対決”だった。が、その模様はテレビで実況中継されなかった。なぜか。「スポンサーが降りたといわれる」（テレビ朝日。ニューステーションのスポーツ・キャスターの発言）。日本での世界タイトルマッチで中継がないのは異例である。

「北朝鮮籍」の新チャンピオンは語っている――  
『試合前、（南北）統一歌が流れたときは涙が出そうになった。申し訳ないけど、君が代は耳に入らなかった。』  
新チャンピオンはリング上から「同胞のみなさん、朝鮮は一つだ」とのシュプレヒコールを送った。観衆は「一つだ」との大合唱で応えて、幕が下りた試合だった。（共同通信配信。ここでは『信濃毎日新聞』同年八月二八日より）

## おわりに

このようにみえてくると、投書欄は「世のため人のため」について考えさせてくれるのではなからうか。様々な提言あり。今回は紹介してはいなくとも、老人介護について、医療について、企業責任や政治の在り方について。ゴミ処理・リサイクル・ボランティア・日常のマナーについての発言も多い。さらには家族のこと、自然の賛歌や戦争と平和の問題……。

私の「公益学事始」は、ごく限られた期間にみられた意見の、またそのごく一部を紹介することから始めてみた。それらは、全て恣意的に選ばれている。いわゆる科学的な選択には基づいてはいない。拙稿が「公益学」のお役にたつのかどうかについては、正直いって全く自信がない。

それでも始めてみた。本誌に参加させていただいた。

## 追記

紙幅はつきているのだが、『事始』のために次の投書も紹介しておきたい、お許しを。その洒脱な文章の中にみえる遊び心・自分を愛する心、他人と自分への贈り物の話は他の投書の文面とおなじく「私益」を越えていないだろうか。

『午前中、「お届け物です」という声。それは、山形産の二箱のサクランボ、何とかかわいい果物だろう。大好きな私は胸をワクワクさせながら、お皿にとつて頂いた皮が柔らかく、お味も絶妙である。残りを大切に冷蔵庫に入れる。小学校一年生の時に、お皿に盛られたサクランボを絵に描いて張り出されたことを覚えている。そのころから私のサクランボ好きは始まっていたらしい。

夕方、また「お届け物です」の声。またまた山形産サクランボ一箱。今日は何とサクランボの届く日なのかしら。胸をドキドキさせながら一つ二つ頂く。色もお味も朝のものとは少し違ったおいしさ。これも大切に冷蔵庫に入れる。

実は私も数日前、山形の農園にお中元として注文したばかり。やがて受け取った方々は、かわいいサクランボに、にっこりして喜んでくださると思う。

昔、主人が山形のおみやげにサクランボを持ち帰った。その大粒の美しさと味に感激し、それから山形というとまず、サクランボが頭に浮かぶようになった。最近は産地直送で便利になったが、そのころは山形に行って持ち帰るのだから、珍しく、貴重品だった。

寝る前に冷蔵庫をそつとあけて三箱のサクランボを確認する。明日を楽しみにドアを開める。今晚はサクランボの夢を見るんじゃないかしら。（主婦・七八歳。東京都練馬区。橋本 浜 『女の気持ち』二〇〇〇年七月六日。『毎日新聞』より）